

中国電影大観

★★★★



レジェンド 三蔵法師の秘宝 (天脈傳奇／The Touch)

2005(平成17)年4月30日鑑賞<ユウラク座>

監督＝ピーター・パウ／出演＝ミシェル・ヨー／ベン・チャップリン／リチャード・ロクスバーグ／ウィンストン・チャオ／ブランドン・チャン／ラン・シャン（日活配給／2002年中国、香港、台湾映画／104分）

第2章

ハリウッドに与えた影響大！

……この映画の売りは、第1に主演女優ミシェル・ヨーがみせるカンフーアクション。そして第2に青島・敦煌・チベットと中国大陆4000キロを移動した一大ロケによって見せる景色の美しさ。敦煌のヤダン砂漠やチベットのラサにあるポタラ宮そして四大聖湖のひとつナムツォ湖は特に最高！ こんな映画でなければ絶対に観ることができないものだ。「三蔵法師の秘宝を探せ！」という単純な設定ながら、次々と展開される美しい映像はすばらしく、十分楽しめる映画だヨ……。



主演女優に注目！

この映画にイン役として主演するミシェル・ヨーは、ジャッキー・チェンを相手に吹き替えなしでスタントを演じたことで有名なアクション女優。『007／トゥモロー・ネバー・ダイ』（97年）でボンドガールに抜擢され、その後『グリーン・デスティニー』（00年）で一躍世界的に有名になったと紹介されている。しかし、実はそれ以上に有名な作品がある。それは『宋家の三姉妹』（97年）。彼女はこれに長女**アイレイ**露齡役として出演し、香港電影金像獎（香港アカデミー賞）助演女優賞を受賞している。演技もできるしアクションもできるという珍しい女優がこのミシェル・ヨーというわけだ。

この映画は彼女のアクションを最大の「売り」としているだけあって、その男勝り(?)のアクションはさすがにお見事！

『グリーン・デスティニー』と比較

この映画を観た翌日、昔映画館で観た『グリーン・デスティニー』をあらためて自宅のビデオで観た。ところがこれは、ミシェル・ヨーよりも、若手女優の成長株である章子怡^{チャン・ツイイー}の方が注目される結果となっているため、ミシェル・ヨーとしては少し不本意なのでは……？

またアクションも、『グリーン・デスティニー』のそれは、その後の『HERO（英雄）』（02年）や『LOVERS（十面埋伏）』（04年）の原型となった『マトリックス』（99年）型（？）のワイヤー・アクションであるのに対し、この映画でミシェル・ヨーが見せるアクションは、彼女にしかできない本来のカンフーアクション。つまり「マーシャル・アーツの女王」と称されたミシェル・ヨーの実力がしっかりと紹介されているわけだ。

そりゃ、本人が設立した製作会社である「ミシカル・フィルムズ」の第1回作品として、この映画でプロデューサーデビューをしているのだから、自分のもち味を最大限発揮させたのは当然……。

誰かとそっくり……？

このミシェル・ヨーという女優はそれほど美人というわけではない……？ また、1962年マレーシア生まれだから既に42歳。しかしアクションはもちろん、それ以外の表情も豊かで個性的魅力がいっぱい。そして映画を観ている間、私はずっと「これは誰かに似ているゾ」と思っていたら、やっと思い出した。それはマルシア……。

マルシアはブラジル出身の歌手で、1989年に『ふりむけばヨコハマ』でデビューしたうえ、日本レコード大賞最優秀新人賞を受賞した実力派。「～でございます」という変な日本語のしゃべりが特徴で、今は各種のバラエティー番組でも大活躍している。1994年に俳優の大鶴義丹と結婚した（その後2004年に離婚）が、そのキャラは健在だし、歌のうまさも今なお十分という実力派。

ミシェル・ヨーはこのマルシアと顔立ちやその表情がそっくりだと私は思うのだが、それはひょっとして私だけ……？

もう1つの売りは一大ロケの敢行

私がこの映画を是非観ようと思ったのは、「チンタオ、敦煌、チベット……広大な中国大陆で壮大な冒険が始まる！」「大陸4,000キロを移動した一大ロケ撮影、国際的なキャスト&スタッフ——圧倒的スケールで贈る超大作!!」というパンフの売り言葉。

これが、ミシェル・ヨーのアクションに次ぐこの映画のセールス・ポイントだ。北京、青島は別に驚くものではないが、敦煌近くのヤダン砂漠（ヤダン地形国立地質公園）の美しさにはビックリ。

また敦煌のまちも私が2001年8月の西安・敦煌の旅で現実に見たものと対比しようと、くいいるようにスクリーンを観ることに……。

はじめてみるチベットのまち

さらに驚いたのは、チベットのラサのまちや7世紀の建立と伝えられている歴代ダライ・ラマの離宮であるラサのポタラ宮。ここは何と標高3,000メートルの土地にあるとのことだ。ヒマラヤ山脈がすぐ西にそびえ立っているということがホントに実感されるすばらしいまちと宮殿の風景だ。

さらにもう1つすばらしい景色は、チベットの四大聖湖の1つであるナムツォ湖。スクリーンに映る時間は短いものの、その美しさにはホントにうっとり。ここは世界一標高の高い塩湖で、中国で2番目に大きな湖とのこと。私も是非一度は……？ しかしパンフレットによると海拔4,700メートルとのことだから、高山病にほど用心して行かないと……。



『レジェンド 三蔵法師の秘宝』DVD 好評発売中。3,990円（税込）

共同発売：日活、東芝エンタテインメント

販売：日活

テーマは三蔵法師の秘宝探し！

中国大陸4,000キロの旅（ロケ）を必要としたのは、「三蔵法師の秘宝探し」をテーマとしてストーリーを組み立てたため。西遊記の三蔵法師のモデルとしてよく知られている玄奘三蔵は、唐の時代である7世紀にゴビ砂漠を横断したうえさらに天山山脈を越えてインドにたどり着き、5年間の修行を経て西安（長安）に戻り、持ち帰った仏教典の翻訳をした著名な高僧。

ハリウッド映画にひけをとらない映画をつくることを目指したプロデューサーとしてのミシェル・ヨーは、そのための舞台としてやはり「母なる大地」である中国大陸を選ぶとともに、ストーリーの核として世界的に有名な三蔵法師の物語をもってきたというわけだ。

映画の舞台は？

映画の前半は、西域地方やチベットではなく北京と青島が舞台。ここでじっくりと主人公をはじめ主要な登場人物たちを紹介（？）するとともにストーリーのテーマを設定し、その後、秘境の地（？）敦煌・チベットへと誘うことに……。これは、あの『グリーン・デスティニー』で、当初は北京での「碧命剣」をめぐる騒動を描き、中盤では突然章子怡が西域の旅の途中、盗賊に襲われながら結局この盗賊と恋仲になっていくという面白いストーリーを絡めたのと同じようなもの。やはり中国（大陸）の魅力は、北京・青島などの中心部と敦煌など西域地方のアンバランスさにある……？

私はつついこんなことを考えてしまうが、中国の歴史や地理について詳しい知識や興味のない方は、私がここで述べたような難しいことは考えず、ミシェル・ヨーらのアクションと次々に変わっていく広大な中国大陸とそのまちの美しさを味わえばそれで十分！

秘宝に近づけるのはサーカスの技術者のみ！

主人公のインは、サーカス一座「The Touch」の座長（ウィンストン・チャオ）の娘。弟のトン（ブランドン・チャン）とともに「The Touch」の空中ショーの花形スターだ。映画は、何百年もの間厳しい訓練を重ねてきたこんなサーカス一族こそが秘

宝に近づける技術を身につけていることを少しずつ物語っていく。

インは、父親が語る「敦煌の心臓」の伝説については当初半信半疑だったし、そこに近づくことによる危険を考えると、弟が興味をもつことを禁じたかったのだが、現実とは逆の方向に……。その結果、今は何がなんでも生命を懸けてその秘宝を探す旅に出ることに……。



ワルも結構魅力的

一方、「敦煌の心臓」を狙って組織的な活動を展開するワル役はカール。このカールを演ずるリチャード・ロクスバークが中国人でないことは一見して明らか。したがって、なぜこのカールの立派な邸宅が青島にあり、その一味が「敦煌の心臓」を狙っているのかは、サッパリわからない。しかしまあ、そんなややこしい前提問題は横において、まずは「敦煌の心臓」争奪戦のスタートからの物語で十分。このカールが悪役ながらかなり知的で魅力的なことが、この映画の出来を良くしている1つの要因……？



泥棒のエリックとは子供時代に……

一貫してインを助けるのは、腕はいいがちょっとズルい、しかしそれでいてインに対しては誠実という不思議なキャラクターの男エリック（ベン・チャップリン）。エリックも一見して中国人ではないことは明らか。こんなエリックとサーカスの座長の娘であるインが知り合ったのは子供時代。お腹をすかせてサーカス一座に泥棒に入ってきたエリックがつかまえられたためだ。インの父親はそんなエリックに食事を与えたが、エリックは父親から厳しい訓練を受けている美しい娘のインをただ見つめていた……。その結果……？



敦煌で待つ僧侶は

既に一足早く「敦煌の心臓」を持ち去ったカールたち一味が赴いた敦煌に向かってインとエリックは進んだ。その道中にもいろいろと楽しいハプニングがあるので、それは映画の中で十分お楽しみに……。

カールらが敦煌で先に面談（？）を果たしたのは、何百年も「敦煌の心臓」が戻ってくるのを待っていたという僧侶。結局この僧侶はカールらによって殺されるのだが、

この僧侶を演ずる役者がラン・シャン。

彼は『グリーン・デスティニー』でも重要な役柄で出演していた「ランおじさん」の愛称で親しまれていた台湾の国民的俳優だが、パンフレットによると、この映画が彼の遺作になったとのこと。合掌……。

女性ヴォーカルに見るチベットは？

この映画は、舞台が青島から敦煌へと移動し、ラストがチベットのラサ。インとエリックがカール一味から奪い返した「敦煌の心臓」によってやっと手に入れた「三蔵法師の遺骨」をラサにあるポタラ宮に無事持ち帰ることによって、映画は終了するわけだ。そして最後に字幕とともに流れるのが女性ヴォーカルの美しい曲。字幕で紹介されるこの曲の歌詞には、ラマ教の教えを含んだ意味シな内容が……。

前述のように、このラサのまちやポタラ宮はヒマラヤ山脈に近い高地にあるのだから、観光で行くにも高山病を心配しなければならないところ。しかしこの歌を聴いていると、より一層このラサに行ってみたいという思いが……。

◆なぜかセリフは英語！

この映画の原題は「天脈傳奇」そして英題は「The Touch」。そして2002年の中国・香港・台湾製だが、なぜかセリフはすべて英語。ストーリーの単純な映画だから、英語のセリフの方がわかりやすい面はあるものの、やはり北京・青島・敦煌・チベットを舞台としてくり広げられる秘宝探しのアクションものという映画であれば、悪役のカールやインの友人のエリックは英語でもいいが、少なくとも主人公のインなどは中国語のセリフでやってほしかった……。

さらにラストのシーンに登場するチベットのラマ教の高僧たちがみんな英語をしゃべるのには大きな違和感が……。

やはり言葉はわからなくても、中国語のイントネーションの方がこの映画の舞台にはピッタリだ。少しは英語がわかるだけに、よけいその不自然さが目立つのだが……。

2005(平成17)年5月2日記